

真理に惑う啓蒙主義

—— ベルリン水曜会における「真実／真理」言説の差異 ——

須 藤 秀 平*

1. はじめに——本論文における問題とその射程

世界最大の記述的英語辞典『オックスフォード英語辞典 (Oxford English Dictionary)』が2016年の「今年の言葉」として「ポスト真実 (post-truth)」を選んだことはまだ記憶に新しい。このときジャーナリストの心境はいかほどのものだったろう。「ポスト真実」、すなわち「客観的な事実や真実よりも、感情的な訴えかけが多くの人に影響を与え、世論形成に大きなインパクトをもたらし始めている」とされる状況に対し、例えば報道番組のキャスターで『NHK ニュース』英語放送の同時通訳も務めた国谷裕子は、動揺を隠さずにこう述べる。

ポスト真実という言葉の誕生は、真実を取るに足らないものと受け止める社会の広がりのようにも思え、ジャーナリズムにとって深刻な事態だ。²

* 福岡大学人文学部講師

本論文の執筆にあたり、日本学術振興会科学研究費助成事業研究活動スタート支援（課題番号：19K13192）の助成を受けた。

¹ 国谷裕子「ポスト真実時代のジャーナリズムの役割」、『世界思想』第45号「特集 メディア・リテラシー」、世界思想社、2018年、2頁。

² 同上。なおこの引用文は、国谷が当時すぐに「日経新聞に連載していたエッセイ」に書いたとされる文章の孫引きである。

この発言が、報道に携わる者の誠実さにもとづくという点に疑いを挟むつもりは毛頭ない。だが他方ではそれ以前より、新聞雑誌あるいはテレビ放送といったメディアこそが真実を伝えていないという批判もまた散見する。日本において言えば、特に2011年3月11日の東日本大震災における福島第一原発事故に関する一連の報道は、そうした疑念を多くの国民が抱くきっかけを供した。アメリカ人ジャーナリストで当時ニューヨーク・タイムズ東京支局長を務めていたマーティン・ファクラーは、『「本当のこと」を伝えない日本の新聞』(2012)の中で、放射性物質の拡散状況等をシミュレーションする「緊急時迅速放射能影響予測ネットワークシステム (SPEEDI)」の試算結果が当局によってすぐに公表されなかったこと、そして大手メディアがその事実を知りながら紙面で訴えなかったことを取り上げ、³それを「当局の隠蔽工作に荷担することになってしまった」⁴という強い語調で批判した。

メディアの功罪という膨大な問題についてここで何らかの判断を差し挟むことは筆者の手に余るが、いずれにせよ確認できるのは、ここ十年間ほどの流行的現象として、メディアにおける真実という問題が人々の関心を集めているということである。だが、このときごく素朴な疑問として、そもそも「真実」とは何かと問うてみることも——決して「真実を取るに足らないものと受け止める」わけではなく——可能なはずだ。現代を「ポスト真実」と呼ぶうるからにはそれ以前に「真実」の時代があったわけだが、はたしてそれはそこまで自明のものだろうか。

歴史全体に目を向けるなら、新聞雑誌に代表されるメディアが「真実」を伝えることを使命として掲げたのは、実はそれほど古いことではない。近代

³ マーティン・ファクラー『「本当のこと」を伝えない日本の新聞』、2012年、63-72頁を参照。なお、いわゆる3・11にまつわる一連の報道に関わった、彼を含むニューヨーク・タイムズ東京支局スタッフは、2012年ピューリッツァー賞国際報道部門のファイナリスト（次点）に選出された。

⁴ 同上、3頁。

ジャーナリズムの揺籃の地であるヨーロッパにおいて、少なくともドイツ語圏では、そうした真実の報道を旨とするジャーナリズムは、理念として提唱されるようになるだけでも18世紀末を待たなければならなかった。⁵もちろん、制度的に確立するのはさらに後のことである。そうであるなら、我々は「真実」時代の終焉を嘆く前に、それがいつどのようにして始まったのか——あるいはそのような時代が本当にあったのかどうか——を知っておくべきなのではなかろうか。

これらをふまえ、本論文は、メディアと真実をめぐる問題を歴史的視点から考察する。すなわちドイツ語圏における広義のジャーナリズムにおいて「真実／真理 (Wahrheit)」⁶という言葉がどのように捉えられ用いられたのかを、歴史的なテキストに即して明らかにする。対象とするのは、「真理を知ることができる」という迷信⁷が支配的であったとされる啓蒙主義の時代、特に1780年代の言説である。たしかに、当時の著述家の典型である啓蒙主義の思想家たちは、後で詳述するように、しばしば「真理」を自明のものとして捉え、あまりに楽観的に扱った。しかし同時にその時代は、それまで観念的な領域でのみ活動していた思想家たちが、実践的運動として「著述の主目的を公衆 (public) の教育とするジャーナリズム」⁸に携わり始めた時代、要するにドイツ・ジャー

⁵ 筆者はここで、人々に「真実の声 (Stimme der Wahrheit)」を届けることを新聞の理想とみなしたカール・フィリップ・モーリッツ (1756-1793) の小文『完璧な新聞の理想 (Ideal einer vollkommenen Zeitung)』(1784)を念頭に置いている。Karl Philipp Moritz Werke in zwei Bänden. Hrsg. von Heide Hollmer und Albert Meier. Bd. 2. Frankfurt am Main 1997, S. 861.

⁶ ドイツ語の Wahrheit の訳語について、ジャーナリズムに関する文脈では「真実」あるいは「真相」といった訳が妥当であろう。しかし、以下に詳しく見るように、18世紀啓蒙主義の文脈では、知的エリートである教養市民が人々に正しいことや善いことを教えるという構図でその言葉がしばしば用いられている。この場合には「真理」という訳がふさわしい。以下では、Wahrheit の訳語として「真実」「真理」の両方を用いる。

⁷ 神尾達之「「真理の教えに抗って」——啓蒙主義以降のヴェールの象徴について」、早稲田大学ドイツ語学・文学会『Waseda Blätter』第3号、1996年、25頁。強調は引用者による。

⁸ Vgl. Beiser, Frederick C.: Enlightenment, Revolution, and Romanticism. The Genesis

ナリズムにおける一つの転換期でもあった。

そうした変化の中で、啓蒙主義者たちの「真実／真理」の捉え方も決して一様ではない。その差異を明らかにするために、本論文では具体的対象として、啓蒙専制君主として知られるフリードリヒ大王（在位 1740-1786）統治下のベルリンで組織された啓蒙主義のサークル、ベルリン水曜会における議論を追ってみたい。彼らの議論には、ジャーナリストとして真実を報道するという理念はいまだ見られない。それどころか、人々に「真実／真理」を教えることに対する躊躇さえも確認できる。そうしたいわば「^プレ真実」時代の「真実／真理」言説を探ることで、その後訪れるはずの「真実」時代について考察するための手がかりを提供するのが本論文の目的である。

2. 「^プレ真実」時代の「真実／真理」——ベルリン水曜会の議論

1783年から1798年まで存続したベルリン水曜会は、政治家、法律家、神学者、教育家、医者といったエリート市民を中心に構成されていた。それでも彼らが活動目的として掲げたのは、「学問に関する目的や教養層の目的のみならず、公益に奉仕する（gemeinnützig）という目的」、より具体的には「民衆教育（Volkserziehung）⁹に関するフリードリヒ大王の考えを可能な限りで実践に移すこと」¹⁰であった。すなわち、社会全体の利益を考慮し、啓蒙の普及を目

of Modern German Political Thought, 1790-1800. Cambridge, Massachusetts, London, England 1992, S. 9f.

⁹ Volk という語は「民族」や「民衆」、あるいは場合によっては「国民」とも訳しうる多義的な言葉であるが、ここでは明らかに「教養層」とは異なる人々、すなわち教養の面でエリート市民に対置される下層の「民衆」を指している。もっとも、ベルリン水曜会の議論の中でも、Volk という語が下層民に限定されない「国民」を指して用いられる場合もあることを言い添えておく。

¹⁰ Ludwig Keller: Die Berliner Mittwochs-Gesellschaft. Ein Beitrag zur Geschichte der Geistesentwicklung Preussens am Ausgange des 18. Jahrhunderts. In: ders. (Hrsg.): Monatshefte der Comenius-Gesellschaft. Bd. V. (1896) Heft 3 u. 4, S. 91. ベルリン水曜会は秘密結社であり、その存在が明らかにされたのは、解散後 100 年近くを経た 1885 年のことである。解散後には文書の大部分が廃棄されていたため、本論文で以下に取り上げるメーゼンの提案やそれに対する会員の返答も長いあいだ知られていなかった。ケ

指して集まった、いわば非営利の教育振興団体である。会合は水曜日、当番となった会員の自宅で月に一回か二回のペースで開かれ、政治、法、哲学、宗教など多岐にわたる議題について討論が交わされた。その際、当番の会員が短い基調講演をし、それに対して会員たちが一人ずつ意見を述べ、また会合後には各自の意見を文章化し順番に回覧する形で議論を深めていく、というのが通例であった。¹¹

そのようにして議論された題目の一つに、「啓蒙とは何か」という、当時のドイツ知識人のあいだで最大の関心を集めた問いがある。この問いに関して当時書かれた著作としては、哲学者カント（Immanuel Kant, 1724-1804）の論文「啓蒙とは何かという問いに答える（Beantwortung der Frage: Was ist Aufklärung?）」が最も有名だが、その論文が『ベルリン月報』1784年12月号に掲載されるよりも一年ほど前に、同問題はすでにベルリン水曜会において提起され、議論されていたのである。

1783年12月17日、フリードリヒ大王の侍医であるメーゼン（Johann Karl Wilhelm Möhsen, 1722-1795）は、ベルリン水曜会の会合で「同胞市民の啓蒙のために何が必要か」というタイトルの講演をおこなった。翌日以降にはその講演内容を記した文書が回覧され、各会員が順番に自らの意見を表明していった。1783年末からおもに1784年2月まで（会員の一人は4月に回答）の約二か月にわたる議論の中では、啓蒙の規定に関して様々な意見が出されたほか、「真実／真理」という言葉が度々取り上げられている。だが、その言葉の意味内容は彼らのあいだで必ずしも一致していない。以下に整理してみよう。

ラーの論文は先行研究をふまえつつ、そのときの議論の全貌をまとめたものである。以下、ベルリン水曜会の会員の発言は、このケラーの論文から引用する。資料に関する上記の経緯、またベルリン水曜会およびその議論の概要について、西田雅弘「ベルリン水曜会の啓蒙論議——カント『啓蒙とは何か』（1784年）の歴史的地平」、『下関市立大学論集』第56巻、第1号、2012年を参照。

¹¹ 田口武史『R・Z・ベッカーの民衆啓蒙運動——近代的フォルク像の源流』、鳥影社・ロゴス企画、2014年、256頁を参照。

2-1. 真理を育み、普及させるという提案

まずはメーゼンが提起した問題について詳しく取り上げておきたい。講演「同胞市民の啓蒙のために何が必要か」において目標とされたのは、大まかに「我々自身およびこの地の同胞市民を啓蒙すること」、そしてそうして育まれた啓蒙の光をベルリンから「我々に共通の祖国であるドイツ全土に広める」¹²ことであった。これらの目標を達成するための課題として、メーゼンは全六項目の提案をおこなった。啓蒙に関する当時の言説を探る上ではいずれも興味深い、ここでは本論文に直接関わりのある項目3および6のみ、抄訳して引用する。

3. 有害極まりない先入見や誤謬 (Vorurteile und Irrtümer) を指弾し、根絶した上で、誰もが知っておかなければならないような真理の数々 (Wahrheiten) を育み、普及させること。

6. プロイセンアカデミーが1778年に出した懸賞問題、「新たな誤謬 (Irrtum) へと誘惑されることによって、もしくは慣れた誤謬に置かれたままにいることによって欺かれることは、一般大衆層 (der gemeine Haufen des Menschen) にとって有益か」という問題について、正反対の立場で書かれた二つの受賞論文をつぶさに検証すべきか否か、また我々の努力が、公衆 (Publico) の枠外でも国家や政府にとって有益なのか、あるいは有害なのかを問う。¹³

「真理」および「誤謬」をそれぞれ議題としたこれらの提案から確認できるのは、一つにはメーゼンが啓蒙主義者の担うべき課題として、啓蒙を阻害する「先入見と誤謬」の根絶と、それに代わる「真理」の普及を求めたということである。

¹² Keller, a. a. O., S. 74.

¹³ Keller, a. a. O., S. 74f.

しかし他方では、「真理」を普及させるというその方策について啓蒙主義者のあいだで意見が割れていたこともまた窺われる。アカデミーの懸賞問題にあるように、「一般大衆層」にとっては「誤謬」もまた「有益」でありうるという考え、反対に言えば「真理」を果たして万人に普及させてよいのかという疑念が彼らのあいだには根を下ろしていたのである。

これら以外の項目を含めたメーゼンの提案に返答する形で会員たちは議論を進めていったわけだが、そのとき彼らの関心を最も多く集めたものの一つが、項目3の「先入見や誤謬」そして「真理」に関する提案であった。すなわち、啓蒙に従事する者として自分たちはそれらをどう扱うべきか、あるいはそもそも「先入見」「誤謬」「真理」とは何を指すのかが問われ、それぞれの立場から意見が寄せられていったのである。

メーゼン自身は発案にあたり、「啓蒙とは何か」については「厳密に規定する」¹⁴ 必要を唱えていた。その一方で、真理とは何かという問題については全く顧慮せず、ほとんど自明のものとして扱った。項目3からわかるのは、「真理」が「先入見と誤謬」の反対物であるということ、そしてそれは「誰もが知っておかなければならない」知識あるいは知恵のようなものに相当するということくらいである。もちろん、この提案はあくまで議論の叩き台であり、メーゼンはあえて簡潔な図式を示すことによって他の会員の闊達な議論を促そうとしたとみなすこともできよう。だがそうだとすると、実際にその後何人もの会員によって厳密な規定が改めて求められたことからわかるように、「真理」についてのメーゼンの捉え方はやはり過度に抽象的であったと言わざるをえない。

そうした曖昧模糊とした「真理」を「育み、普及させる」ことで啓蒙が達成されるというメーゼンの構想は、楽観的であるのみならず、多分に恣意的でも

¹⁴ Keller, a. a. O., S. 74.

あった。というのもそうした考え方は、自分たちがすでに「真理」を十分にわきまえており、それゆえ「公衆」を指導する立場にあるという自負に立脚するものだからである。メーゼンが「真理」とみなしたのは、結局のところ彼らエリート市民が有する価値観や倫理観であり、それらをいかにしてドイツの「公衆」に広め、定着させるかという問題こそが彼にとって最大の関心事だったのである。¹⁵

いずれにせよ、講演後の文書の交換を通じて、「真理」の扱い方について他の会員たちから補足がなされるとともに、その是非に関して様々に意見が寄せられることで議論は立体的に展開していくこととなる。

2-2. 有益な誤謬、有害な真理

メーゼンの提起した問題に対し最初に意見を寄せたのは、法学者で後にプロイセン一般ラント法を起草したクライン（Ernst Ferdinand Klein, 1744-1810）である。彼はメーゼンの講演から三日後の1783年12月20日に、「真理」および「誤謬」について次のように述べた。

私の考えでは、啓蒙とは知識（Kenntnisse）の広がりにより我々が事物の真の価値を正しく評価できるようになることであり、この意味で取れば、啓蒙はいつも必ず徳と幸福を道連れとする。ここからさらに推論すれば、ある意味で真理はどれも有益であり、誤謬はどれも有害であると言えそう。だがこのとき、次の留保を書き添えておく必要がある。それは、ある人間の観念連鎖に結びつけることのできない孤立した真理（isolierte Wahrheiten）には説得力もなく効果もない、ということである。してみると、これまである人間の階層において、ある誤謬が、彼らが格別注意を

¹⁵ 田口、前掲書、31頁以下を参照。なお、田口が指摘するように、ここでメーゼンが啓蒙の対象とする「公衆」とは、「一般大衆層」を含まない上層市民を指している。

払うべき問題について理解を助けてくれたとすれば、人類の友はその誤謬を奪う必要はない。少なくとも、同問題の価値の高さを保証する真理を、その有益な誤謬（der nützliche Irrtum）に代わって提供できるようになるまでは。¹⁶

クラインは、「真理」は有益であり「誤謬」は有害であるという、おそらくは一般的な捉え方を一旦は認めた上で、しかし「真理」が「孤立した」ものである場合には、つまりそれが何らかの問題について人々の理解や判断を助けるのでない場合には、それもまた無意味であるとの留保をつけている。反対に言えば、人々の理解や判断の助けになるものは、それが「誤謬」にもとづくものであれ「有益」である。要するにクラインは、ある事柄が「真理」であるか否かよりも、人々が「事物の真の価値を正しく評価できる」ようになるためにそれが役に立つかどうかという基準で是非を判断しているのである。

そのさらに三日後の12月23日に出されたスヴァーレツ（Carl Gottlieb Svarez, 1746-1798）の表明においても、これと同様の見解が示されている。もっとも、クラインの見解が「誤謬」もまた有益でありうるという柔らかな表現をとっていたのに対し、スヴァーレツの考えはいささか矯激である。

スヴァーレツはまず、同時代の特に切実な問題として、「啓蒙とは何か、そしていかなる段階の啓蒙が、国民の各階層にとって願わしいものであるか」¹⁷という問いを挙げている。すなわちスヴァーレツは、啓蒙には社会層ごとのグラデーションが必要であると考えたのである。そして、問いに対する彼の答えは次のようなものであった。

もし人民（Volk）のあらゆる階層が啓蒙の最高段階にまで高められるこ

¹⁶ Keller, a. a. O., S. 77f.

¹⁷ Keller, a. a. O., S. 78.

とが可能なのであれば、答えはいたって簡単であろう。だが、それは望むべくもないのだから、啓蒙のいずれの段階が国民（Staatsbürger）の各階層が有する理解力、思考や行動の様式、外面的事情にふさわしいのかを規定することは、いまだ困難かつ重要である。¹⁸

啓蒙は万人が成し遂げうるものではない、というのがスヴァーレツの基本的な理解であり、それゆえに国民の「各階層」に合わせた啓蒙が必要になると彼は主張する。この見方がエリート市民による、いわゆる上からのものであることは明らかだ。

こうした立場を表明した上でスヴァーレツは、「庶民（der gemeine Mann）」が行為の動機とすることに慣れている「ある種の原則や見解」の扱い方について、次のような見解を示している。

そうした見解が道徳（Sitte）にとって好都合（günstig）であるならば、たとえそれ自体が不確かであったり疑わしいものであったり、もっと言えば間違っていたとしても、それを民衆（Volk）に疑わしいものかどうか、ましてや軽蔑に値するものかどうかということをあえて気づかせるかどうかには慎重になるべきだろう。

もし民衆から道徳的に善い行為の動機となるものを奪い、その代わりになるものを与えなかったとしたら、それは啓蒙ではなく道徳の腐敗（Sitten-Verderbnis）を促進することになる。¹⁹

ここでは「真理」という言葉は用いられていないものの、大筋はクラインが示した「有益さ」を「真理」に優先させる考え方と似通っている。だがスヴァー

¹⁸ Keller, a. a. O., S. 79.

¹⁹ Ebd.

レッツはクラインと異なり、その「有益さ」の度合いを個人の理解や判断のレベルにとどめず、「道徳」という観点において測ろうとする。そうしたスヴァーレッツにとって、「真理」はある個人にとって必ずしも役に立たないというばかりか、人々の「道徳」のために「好都合」でない、ひいては社会にとって有害な場合もありうるのである。

これらをふまえた上で、スヴァーレッツの関心は「大勢の読者公衆（lesendes Publikum）に向けて書く著述家（Schriftsteller）」²⁰の役割へと、そしてプレス自由と検閲の問題へと向けられていく。結論としては検閲もまた必要であるという提言に至るのだが、これについてもスヴァーレッツは啓蒙の程度に応じた段階を想定している。

国民のうち、すでに啓蒙された一部の者たちだけが読むことができ、またそうするように求められている著作には、私は無制限の印刷と出版の自由を望んだ。それに対し、普通の民衆が読み耽る（gewöhnliche Volksleserei）という場合には、私の考えではよくよく注意を払った検閲が絶対に必要である。²¹

ここで興味深いのは、検閲の基準が著作物の内容ではなく受容者に応じて設定されているという点である。スヴァーレッツにとっては、出版物の内容そのものよりも、それを誰が受容するのかという点が重要なのである。そして同じ内容の知識であれ、受容者によっては「啓蒙」につながることもあれば「道徳の腐敗」を招くこともあるという考えから、彼は検閲の導入を、すなわち情報や知識を制限するという方法を求めるのである。こうして、ある特定の人々に対しては、あえて「誤謬」を取り去らないというだけでなく、「真理」を意図的に

²⁰ Ebd.

²¹ Keller, a. a. O., S. 80.

隠蔽するという方策が打ち出されることとなる。

ここには歴史的に見て興味深い点を確認できる。それは当時の啓蒙主義者が「民衆」もまた「読者公衆」の一部をなしつつあることを感知していたという点である。「普通の民衆が読み耽る」ことに対し制限をかけようとするその姿勢はたしかに抑圧的で排他的ではあるが、そうした方策を必要としたのは、「民衆」もまた読書をしようということ、そしてそれにより公共圏 (Öffentlichkeit) の一端を担いうるということを彼らが認識していたからに他ならない。その上で指摘すべきは、エリート市民たる彼らが抱えていた二律背反である。啓蒙の普及を目指していたはずの、特に「民衆教育」を「実践に移す」²² ことを活動目的としていたはずのベルリン水曜会においてさえ、実際には「二重規範」を、すなわち啓蒙の絶対条件として言論と出版の自由に賛成するが、民衆に対しては何らかの制限を要求するという「二重規範」²³ を免れていなかったのである。

2-3. 可変の先入見と永遠の真理

その一方で、「真理」に対する制限を可能な限りで取り除こうと唱えた者もいた。メンデルスゾーン (Moses Mendelssohn, 1729-1786) は 1783 年 12 月 26 日、メーゼンの提案および先行する会員たちの返答をふまえ、啓蒙が社会に害をもたらすという危惧に対し冷静な判断を呼びかけている。

彼はまず、啓蒙の「有益さ」や「有害さ」について、抽象的概念としてではなく具体的事例にもとづいて議論すべきであると提言する。

私は啓蒙一般、とりわけ自らの意見を表明する無制限の自由がどこで公共の幸福を実際に損なったのか、歴史上の実例から調査されることを望む。²⁴

²² Keller, a. a. O., S. 91.

²³ 田口、前掲書、38 頁以下を参照。

²⁴ Keller, a. a. O., S. 80.

彼の要求は啓蒙が害となった「歴史上の実例」を示すことであるが、それは啓蒙が実際には「公共の幸福」を損なったことはないという反語的な主張と解釈できよう。また彼が掲げる「自らの意見を表明する」ための「自由」、すなわち言論や出版の自由においては、当然ながら表明された意見を他者が受容することもまた想定されているはずである。つまりメンデルスゾーンは、情報や知識、あるいは何らかの意見が社会に行き渡ることはそれ自体では有害ではないと捉え、その「無制限の」普及を是認したのである。

その後メンデルスゾーンは「先入見」を話題にし、はたしてそれは取り除かれるべきかどうかという問題に向かう。これについても彼の結論はあえて取り除く必要はないというものであるが、重要なのは「先入見の境界」、すなわちどの「先入見」が有害であり、取り除かれるべきかを誰が規定するのかという問題に彼が言及している点である。

国民に浸透している特定の先入見（Vorurteil）に対し、有識者は状況によっては手出ししないでおくべきだという見方——それを私は心底疑わないのだが——が正しいとして、このとき生じるのは、この先入見の境界を、法や検閲官によって規定した方がよいのか、あるいは幸福や、謝意、誠実さのように、個々人の信念に委ねた方がよいのかという問題である。先入見はその本性からして可変的である（variabel）ので、その尺度と目的を永続的な法（fortdauernde Gesetze）によって規定することは不可能であり、また検閲官の判断に委ねることは、いかなる場合でも無制限の自由以上に有害であると思われる。²⁵

メンデルスゾーンにとって、「先入見の境界」はあらかじめ規定できるもので

²⁵ Keller, a. a. O., S. 81.

はない。なぜなら「先入見」は「可変」のもの、つまりは時代や場所によって別様でもありうるような相対的なものだからである。したがって、それは制定された「法」によって杓子定規に測ることができないのはもちろん、誰かが恣意的に取り除いてはならない。むしろ「先入見」に対するそうした画一的な、あるいは恣意にもとづく規定や規制こそが、彼にとっては「先入見」そのものよりもいっそう有害なのである。

「真理」についても同様に、メンデルスゾーンの立場はそれを制約すべきではないとするものである。もっともこれは「先入見」の場合とは反対の理由、すなわち「真理」は「可変」ではなく「永遠」のものであるという理由にもとづいている。メンデルスゾーンは熱気球を発明し、世界初の有人飛行に成功したフランスのモンゴルフィエ兄弟を引き合いに出し、彼らがもたらす変革について次のように述べる。

モンゴルフィエ兄弟の発見は大変革をもたらすだろう。それにより人間社会の最高段階にまで到達するかどうか、それはまだ誰にも判定できない。しかしだからといって人はその前進を助成することに異議を唱えるだろうか。永遠の真理 (ewige Wahrheiten) の発見は、それ自体善いものである。それをどう舵取りするかは摂理の仕事である。²⁶

メンデルスゾーンがここで「永遠の真理」と呼んでいるのは、人々の判断を助ける知恵や価値観のようなものではなく、科学的発見に代表される学問上の成果である。そうした成果は永続性ひいては普遍性を持つはずであり、したがって「善」とみなすべきであると彼は考えている。というのも、その「真理」は漸次的にであれ「人間社会が最高の状態に」向かうのに貢献するはずだからで

²⁶ Ebd.

ある。そして、そうした発展は「摂理」にもとづくものであり、人為が不用意に介入すべきではない、と彼は結論づける。

これもたしかに「真理」を「有益さ」の観点から測ろうとする考え方の一種ではある。しかし、その「有益さ」は現存の社会、すなわち時代や場所の制約を受けた社会ではなく、未来を含めた人類全体を対象にして求められている。この点に、先に取り上げたクラインやスヴァーレツとの差異を見出すことができよう。彼らが目下の社会の「道徳的退廃」をおそれ、「啓蒙」「自由」「真理」といったものを統御あるいは抑制しようとしていたのに対し、メンデルスゾーンは人間社会が最終的には良い方向に発展するという巨視的な進歩史観にもとづき、学問的な「真理」を積み重ねることを躊躇なく容認したのである。

2-4. 主観的で相対的な真理

メンデルスゾーンが意見を表明した翌日の1783年12月27日、早くもそれに対する反論がシュパルディング（Johann Joachim Spalding, 1714-1804）によって寄せられた。シュパルディングは、遠い未来の「改善」のために間近に起こりうる「不幸」を黙認することがはたして許されるのかどうかを問うている。²⁷ この疑念が、「人間社会が最高の状態に」向かうと期待し、進歩を無条件に是認したメンデルスゾーンに対する批判を含んでいるのは明らかだろう。この点で、一見すると正反対の方向に向かうかのように見える両者の論は、しかし現状に対しどのように対処するかという実践面においては意外にも似通っている。これについて考察してみよう。

シュパルディングはまず、啓蒙主義者は何に対して義務を負うべきか、すなわち「真理（Wahrheit）のみを考慮すればよいのか、それとも同時にその有益さや有害さを考慮しなければならないのか」という問いを立てる。そのとき、

²⁷ Keller, a. a. O., S. 83.

「抽象論としてはすべての真理は有益であり、すべての誤謬は有害である、という見方に私は全く異存がない」と一旦は認めた上で、しかし彼が主張するのは、「真理」にせよ「有益さ」にせよ、それらに関する判断は「主観的で相対的な」ものでしかないということである。少々難解な部分もあるが、その主張を引用して考察してみよう。

真理および有益さに関する我々の確信は、ほぼすべて主観的(subjektivisch)で相対的な(relativisch)ものにすぎないのだから、ここで再び生じるのは次の問いである。すなわち、両者のうちいずれからもう一方を推し量るのが確かなのか。

一つ目の場合。私が見うる限りで真理だ(wahr)と認識した見解が、全体として有益さよりも有害さを多くもたらすと推論され、その推論が当たっていたとしたら、その見解はおそらく真理ではない。したがって私はそれを差し控えなければならない。

あるいは逆の場合。これは私にとって納得のゆく真理(mir einleuchtende Wahrheit)なのだ、それゆえ最終的には全体にとって有益なのだ、それゆえ私はそれを発言し、書くべきだ、というもの。

ここでさらなる問い。道德の秤皿の上で真実とみなされた見解の有益さと有害さとを、どんな物差し、どんな重りで測ればよいのだろう。どちらも不確かな可能性にすぎないものであれば、それぞれ相殺されるだけだ。こうしてその意見は、あたかも有益でも有害でもないかのように評価されてしまう。その場合、信じられた真理(geglaubte Wahrheit)が、寛大なる人間愛が要求するものと衝突しない程度の独自の正しさ(eigentümliches Recht)を掲げて、憚らずに世の中を闊歩する。²⁸

²⁸ Keller, a. a. O., S. 82f. 引用文は本来長い一段落の中の連続する一節だが、論を把握しやすくするために引用者が適宜改行した。

シュバルディングは「真理」と「有益さ」のいずれを優先すべきかを問い、「有害」となるおそれがあるという理由で「真理」を「差し控える」場合と、「私にとって納得のゆく真理」を他者にとっても「有益」とであるとみなし普及させようとする場合の両方の可能性を提示している。だが、いずれの場合でも、彼の考えの根底にあるのは、その判断が結局は「主観的で相対的な」ものでしかないという、一種のニヒリズムの認識である。すなわち何らかの「真理」を「有益」とみなそうと「有害」とみなそうと、シュバルディングにとってそれはある個人によって「信じられた真理」でしかなく、「独自の正しさ」を主張するにすぎないのである。この認識は現代における「ポスト真実」、あるいは「大きな物語」の崩壊を謳うポストモダニズムに通ずるものがある。

「真理」に対するこうした捉え方は、それが「永遠の」もの、すなわち永続的で不変のものと信じ、その普及を積極的に求めたメンデルスゾーンとは正反對のものであると言えよう。しかし他方で、「真理」をどのように扱うかという点において、彼らは結果的に共通の立場にある。すなわち、メンデルスゾーンが「永遠の真理」の「前進」を妨げないよう求めたように、シュバルディングは「真理」を「主観的で相対的な」ものとみなすことにより、かえってそれに対する干渉を避ける立場をとっているのである。シュバルディングは「真理」を掲げることによって人々の行為の動機を奪うこと、すなわち「経験(Erfahrung)により有効性が実証されている従来の道徳的動機 (moralische Motive)」に対し、「同等の力を持つ新たな動機を代わりに提供することなく異議を唱える」²⁹ような方法に疑念を呈する。たしかにこれは「孤立した真理」に対し「有益な誤謬」を推奨していたクラインとも類似する考え方ではある。しかし、クラインの考えが「有益さ」を判断基準とし、もし「誤謬」が「真理」よりも「有益」であるならばそちらを選ぶ——反対に「真理」の方が「有益」である場合に

²⁹ Keller, a. a. O., S. 83.

はそちらを選ぶ——という類のものであったのに対し、シュバルディングは「有益さ」という判断基準自体を「主観的で相対的な」ものとみなすのである。このようにして彼は、何らかの価値判断にもとづいて他者の行動に干渉すること自体に対し懐疑的なのである。

他方で、上で引用した「経験により有効性が実証されている従来の道徳的動機」という表現は、反対に言えば「経験」だけは価値判断のために有効な要因となりうると彼が認めたことを意味しないだろうか。シュバルディングは「主観的で相対的な」ものとして退けた「真理」や「有益さ」の代わりに、目に見える実例として示すことができるような「経験」に期待しているのである。この点にも、啓蒙の功罪を評価するために抽象論ではない「歴史の実例」を求めたメンデルスゾーンとの類似点を見出しうる。³⁰

3. おわりに——「プレ真実」時代の行方

現代の「ポスト真実」の問題を皮切りに、本論文ではドイツ・ジャーナリズム史における「真実」時代の開始点を探すべく、ベルリン水曜会における「真実／真理」言説を検討した。それにより明らかになったのは、一つは啓蒙主義が内包する矛盾ないし欺瞞である。啓蒙主義者たちは「民衆教育」を目指し「真理」を重視したが、その普及の是非の判断については会員によってかなり差があった。その理由はどうあれ、万人に対する「真理」の普及をためらう意見が相当な数を占めていたという点で、18世紀末のドイツ語圏は「真実」時代には程遠かったと言わざるをえない。

³⁰ 「真理」にもとづく人類の進歩を無邪気なまでに肯定したメンデルスゾーンは、理念にもとづき現実を変革することを厭わない進歩主義の権化であるように見える。一方で、抽象的理念よりも「経験」が「実証」する道徳的動機を重視したシュバルディングは、歴史の積み重ねの上に成る現在を重視する保守主義の立場にあると言える。進歩主義と保守主義という、フランス革命以降に党派的对立を深める両立場にそれぞれ近接する彼らの共通点と差異を考察するのは興味深いように思われる。もちろん、これについてはさらなる詳細な検討が必要となる。

また、現代の議論では「メディア」や「真実」といった用語としばしば関連付けられる「民主主義」についても、当時のドイツ語圏においてはその欠如が際立つばかりである。冒頭で引用した国谷裕子は、「真実を踏まえて人々は判断するというのが健全な民主主義だったはず」³¹とも発言しているが、この見方が正しいとすれば、「真理」隠蔽の片棒を担いだ点で、ドイツ啓蒙主義を代表するベルリン水曜会は、民主主義とも真っ向から対立することとなる。

いずれにせよ、もし近代ドイツにおいて「ポスト真実」以前の「真実」時代があったと想定するならば、その幕開けは別の時点に探し求めなければならない。本論文を端緒とした今後の展望として考えうるのは、まずは1789年のフランス革命の前後における変化を探ることである。ベルリン水曜会における議論の約十年後の1795年、反啓蒙主義的な立場の者たちによって、反革命派の機関誌『オイデモニアあるいはドイツ国民の幸福、真実と正義の友のためのジャーナル (Eudämonia oder Deutsches Volksglück. Ein Journal für Freunde von Wahrheit und Recht)』が編まれた。表題に「真実と正義の友」という言葉を含むその雑誌において、「真実」はどのように扱われ、また革命以前の啓蒙主義はどのように評価されているのだろうか。だが、これについては稿を改めて検討したい。

³¹ 国谷、前掲論文、2頁。